

釈彦琮の出自と著作

齊 藤 隆 信

はじめに

隋の釈彦琮（557-610）は、これまでの中国仏教研究において取り上げられ評価されることが稀であり、また関連する資料も隋代仏教研究に活用されることはほとんどなかった。しかしながら、そのような現在の評価とは裏腹に、実際の彦琮とは中央政界や文人知識人と太いパイプをもち、隋代の多くの仏教事業に参画していた逸材だったことがわかってきた¹⁾。彦琮の伝記に見られる交友関係としては、皇室関係では北周の武帝、隋の文帝と煬帝、そして文帝の五子で煬帝の弟にあたる楊諒、官僚文化人では王劼、敬長瑜、盧思道、元行恭、邢恕、魏収、楊遵彦、陽休之、辛德源、陸開明、宇文愷、唐怡、陸彦師、薛道衡、劉善経、孫万寿、蘇威、楊素、何妥、蕭愨、諸葛穎、高元海の名が見える。この中で唐怡を除けばみな正史にその名が載っている人物ばかりである。

彦琮がこうした人脈を通して広く活動できたのは、その非凡な才知だけではなく、その出自が関係していると考えられる。そこで本稿では彦琮の出自である趙郡の名門李氏一族について明らかにするとともに、著作の整理とその内容を精査し、なぜその多くが散逸してしまったのかを考察する。

1. 趙郡の李氏一族

道宣『続高僧伝』巻 2 訳経篇、彦琮伝（T50.436b）

釈彦琮、俗縁は李氏、趙郡柏人の人なり。世に衣冠と号し、門は甲族と称す。少^{おさ}なくして聡敏、才藻清新なり。識は幽微を洞き、情は水鏡に符す。物に遇いて斯く覽れば、事再詳すること罕なり。初め信都の僧叵法師に投ず。……十歳に至り方に出家を許され、名を道江に改む。

彦琮の俗姓は李氏、趙郡柏人（柏仁）に生れた。時に北齊の初代皇帝文宣帝（在位 550-559）の天保 8（557）年のことである。出生地の柏人とは北齊の都城である

(18)

釈彦琮の出自と著作（齊 藤）

鄴から北西に約 100 キロの地点にあり、現在の河北省邢台市隆堯県にあたる²⁾。

彦琮の出自は、北魏以来その名を馳せた趙郡の李氏一族である。「世に衣冠と号す」（世間では貴族と呼ばれている）と評されていることは、士大夫とされる貴族で、庶（庶民）と区別しているのである。さらに「門は甲族と称す」とは、その一門は官僚や文人など代々にわたり高貴な家柄ということであり、名のある文化人を輩出してきた名門中の名門ということになる³⁾。したがって彦琮の出自である李氏とは趙郡の李氏一族をおいて他に考えることはできないのである。

この一族から多くの官僚を輩出していることは、『魏書』『北史』『北齊書』『隋書』『旧唐書』『新唐書』に明記されていることから追認できる。また『新唐書』巻 72 上、表 12 上の宰相世系 2 上には「趙郡李氏」の項目が別に設けられている。それによると秦漢以来の名門であり、一族を南祖、東祖、西祖、遼東李氏、江夏李氏、漢中李氏の系譜に分けて紹介している。この記事内容はもと『北史』に基づくものである。その『北史』巻 33 列伝 21（中華書局標点本 pp. 1235-1236）には、

〔李〕機の子は楷。……男子五人あり。輯・晃・芬・勁・叡なり。……輯は高密郡守に位す。二子あり。慎と敦なり。……其の後、慎と敦は柏仁に居すも子孫甚だ微なり。義（李晃の長子）は南して故壘に徙る。世に之を南祖と謂う。

とあるように、朝臣となった李慎と李敦のころに柏仁（柏人）に移住したと記されている⁴⁾。そして李楷の五人の子である輯・晃・芬・勁・叡のうち、柏仁に移住した長兄の李輯の子（李慎・李敦）と、故壘に移住した次兄の李晃の子（李義）が南祖に、そして李芬と李勁は西方に居したので西祖、末弟の李叡は東方に住して東祖と、それぞれの世系に分かれたという。したがって柏仁の出身の彦琮は南祖系に属す李氏の出身ということになる。

さて、ここで一族の主要な人物を列挙する。趙郡平棘人の李順、李靈、李孝伯が『魏書』の列伝にその名を列ねており、つづく東魏にいたっても『北齊書』巻 22 列伝 14 の李元忠（486-545）がその筆頭であろう。李元忠は彦琮と同じく趙郡柏人の出身で、曾祖父に北魏の定州刺史李靈、祖父の李恢は鎮西將軍、そして父の李顯甫も安州刺史に任じられているように、北魏から東魏の朝臣を担っている。李元忠は太常、驃騎將軍、侍中、驃騎大將軍、儀同三司の要職を歴任した軍人でもあり、趙郡の李氏の中でもその功績は際立っている。その息子の李搔も聡明多芸で音楽方面に秀でており、みずから八絃なる楽器を作るほどであった。彼は起家司徒行參軍、河内太守、尚書儀曹郎を歴任して、彦琮が誕生した北齊の天保 8（557）年に没している。さらに魏東郡太守の李膺、その子で治書侍御史、河内太

守の李煥と、またその子息で并州刺史，建州刺史，襄州刺史，散騎常侍を歴任した李密がおり，他にも李愨や李景遺も朝臣として名を列ねているのである。

加えて『魏書』や『北史』の列伝には李氏一族の女性も紹介されている。その名は不明ながら，趙郡柏仁太守である李叔胤の娘にして范陽の盧元礼の妻であり，尽孝の女性として賞賛され，その没後には「貞孝女宗」の諡号を贈られている。

このように，彦琮は北魏から東魏，北齊にかけて北朝に仕えた名門趙郡李氏の出身であり，彦琮が志学に満たないうちに上に列挙した数多くの官僚文化人らと親しく交わることができたのは，彦琮が「^{おさ}少なくして聡敏，才藻清新なり」と言われるほどの類まれな才知を具えていたためだけではなく，趙郡の李氏一族という出自そのものが，彦琮をして華やかな文人の集うサロンに往来することを可能ならしめた要因であったと考えると得心がいく。中央政界で活躍した趙郡の名門李氏一族という家譜を後ろ盾にして，北朝末から隋にかけて学派仏教・宗派仏教に与することのない彦琮は，仏教の国家的役割の展開を目指したのである。

2. 道江から彦琮へ

彦琮は信都（現在の冀州市）の僧迦法師（未詳）の門に入り出家した。伝に「初め信都の僧迦法師に投ず。……十歳に至りて方に出家を許され，名を道江に改む」とあるのがそれである。その後，鄴や晋陽に出て仏教の研鑽を開始し，北周の承光元（577）年，彦琮21歳の事として，以下のように記されている（T50.436c）。

周武，齊を平げるに及び，尋いで延入を蒙る。共に玄籍を談じて深く帝心に会す。勅して通道観学士に預かる。時に年二十有一なり。宇文愷等の周代の朝賢と大易老莊を以て陪侍し講論す。〔道〕江，便ち外には俗衣を仮り，内には法服を持し，名を彦琮に更む。

北周武帝が北齊を併合することによって，そこでも廢仏が断行され，三百余万の僧尼を還俗させた（『仏祖統紀』巻38，T49.358c）。21歳となっていた彦琮も還俗せざるを得ず，すぐさま在俗知識人として通道観学士に拔擢されたのである。通道観とは仏道二教の融和を図る目的で北周武帝によって設置された国家機関であり，おもに道教の研究と類書の編纂が行われた宗教研究センターである。年齢からしても若すぎる学士ということになり，いささか疑問ではある。しかし，学士にふさわしい耆宿らは廢仏によって還俗させられ，新王朝の学士に就く意志などなく，あるいは廢仏から逃れるために多くは山野に隠れて息を潜め，また江南の陳に脱出していたのであった。彦琮の聡敏さと趙郡李氏という出自もあって通道観学士に就任できたのであろう。同じく通道観学士となった僧侶は普曠（548-620）

(20)

釈彦琮の出自と著作 (齊 藤)

のみが確認されるだけであり、彼にしても当時まだ32歳でしかない。

道宣の『広弘明集』巻10の「周高祖巡鄴除殄仏法有前僧任道林上表請開法事」には以下のように記されている (T52.156c)。

乃ち表すらく、鄴城の義学の沙門十人、並な聡敏にして高明なる者なり。通道観に預からんことを請う。

この任道林の武帝に対する上表の中にある十僧のうちに、あるいは普曠と彦琮が含まれていたのかもしれないが、いずれにせよ、通道観という学府においては120人の学士が在籍しており、仏教からは若くて有能な還俗僧に白羽の矢が立てられたものと考えられる。

さて、上の引文には廢仏によって還俗を強いられたとき、21歳にして名を道江から彦琮に改めたとある。藤善真澄はこの彦琮という名について「おそらく俗名であろう」(『道宣伝の研究』京都大学学術出版会、2002年、p.438)と推測しているがその考証は行っていない。常識的に考えれば還俗した僧が俗名にもどすのは道理であるが、それを傍証するのが次に紹介する文林館学士の李翥なる人物である。

3. 李翥 (李彦鴻) と彦琮

さて、時間は少し遡るが、通道観学士に就く前のことであるが、彦琮は出家して6年後の武平3(572)年、16歳にして父を喪い、それを契機に仏典以外の書籍にも親しむようになる。そして右僕射の陽休之をはじめとする文林館の賢者らと親しく交流する。伝記では「勅により文館に附す」(T50.438a)とあるので、彦琮は勅を奉じて文館(文林館)に入ったのである。

この文林館とは、北齊第五代の後主高緯(温公)により、顔之推らの助力を得て武平4(573)年2月に創設され、国内の文士を集めて文学活動を展開せしめた最高学府である(『北齊書』巻8、武平4年の条を参照)。文林館の活動は詩賦を中心とする南朝梁の文学の影響が強かったとされ、北齊が滅亡するまでの4年にわたって、『太平御覧』の原本とも言われる『修文殿御覧』の編集が中心に行われていた。山崎宏は『北齊書』巻45文苑伝に列挙されている待詔文林館、つまり文林館に招かれた学士65名を一覧にして示している⁵⁾。その中には『魏書』を編纂した魏収や、『顔氏家訓』を撰した顔之推も含まれているように、エリートの文士集団であった。山崎が諸文献から抽出した65名の文林館の学士のうち、彦琮伝の中にその名を搜索してみると、陽休之、王邵、盧思道、元行恭、辛德源、陸開明、薛道衡、劉善経、蕭懿、諸葛穎の10名を数えることができる。したがって、伝記に

ある「陽休之をはじめとする文林館の賢者らと親しく交流する」というのは、彦琮わずか16歳にして、これだけのエリート文士らと交流していたということになる。その時陽休之はすでに還暦を過ぎている。

ここで注目すべきはこれら65名の文林館学士のうち、彦琮と同郷柏仁出身で前済州長史の李翥なる人物である。この李翥は齊に仕え東平太守、司空主簿（皇建元（560）年）、兼散騎常侍（天統4（568）年）、中書舍人などを歴任した官僚でありまた文士でもあるが、晩年に酒に身を持ち崩したため、家屋を失い、そのため仏寺に寄宿して、終日酒を飲んで賓客を迎えるありさまだったことを、『北史』巻33列伝21（中華書局標点本 pp. 1242-1243）は伝えている。

また李翥あり、字は彦鴻、世は柏仁に居す。弱冠より文章を以て名を知らる。齊に仕え、位は東平太守、後に待詔文林館、除通直散騎常侍にして、陳に聘せらる。晩に節頗る酒を貪るを以て累と為し、貧にして宅に居すなく、仏寺の中に寄止す。嘗て巾帔を著し、終日酒に対し、賓客を招致し、風調詳雅す。翥の従兄の子朗、才辞は翥の亜にして、兼て吏能あり、位は中書舍人なり。

この李翥、その字を「彦鴻」といい、柏仁の出身である。彦琮は21歳で廢仏に遭い還俗して僧名の道江を彦琮に改めている。その一字目「彦」が行輩（または字輩、輩字ともいう。父系血族の同世代の兄弟の字の一字目に共通の文字を用いる）と考えられるので、李翥こと李彦鴻と彦琮こと李彦琮とは兄弟（または従兄弟）という可能性が高い。李彦鴻はおそらく一族の長兄、または彦琮と歳の離れた実兄であった可能性がある。彦琮とは世俗で用いる^{あざな}字であったのである。また李彦鴻のはからいでわずか16歳にして文林館に入り、名だたる文人らと交流できたのであろう。趙郡の李氏一族という出自がそれをなさしめたということになる。

さて、彦琮は「世に衣冠と号し、門は甲族と称す」の出身である。つまり名家の出でありながら出家するということは、家督を継ぐ第一子ではなかったはず。先祖追福や一族の繁栄のために親族の中から出家者を出すことは珍しいことではない。「十歳に至り方に出家を許され、名を道江に改」めたが、21歳で廢仏に遭い「名を彦琮に更」めた。その4年後の仏教復興については大定元（581）年のこととして、以下のように記す（T50.436c）。

大象二（580）年、隋文、相（宰相）と作り、仏法稍や興る。便ち諸賢の為に般若を講釈す。大定元（581）年正月、沙門曇延、同挙して度せんことを奏し、方に落髪を蒙る。時に〔彦琮は〕年二十有五なり。

彦琮伝における復仏に関わる記事は、わずかにこれだけであるが、『続高僧伝』

(22)

釈彦琮の出自と著作（齊 藤）

卷8 義解篇の曇延伝には以下のようにある (T50.488c).

天元（天元皇帝＝宣帝）の疾に遭うに逮び、昔愆を追悔して尊像を開立す。且つ百二十人を度して菩薩僧と為す。延は預りて上班に在るも仍に猶し俗相と同じきを恨み、還た林藪に蔵る。隋文、業を創むるも、未だ度僧を展べず。延、初め改政を聞いて即ち剃落を事とす。法服に錫を執り来りて王庭に至り、面に弘理を伸ぶ。……奏して僧を度するに以て千二百五十の比丘、五百の童子の数に応ぜんことを請す。勅して遂に総じて一千余人を度し、以て延の請に副わしむ。此れ皇隋釈化の開業なり。爾の後遂に多く、凡そ前後に別して度を請する者、四千余僧あるべし。周の廢せし伽藍、並な請うて興復す。三宝再び弘まり、功、初運を兼ねる者、また延の力なり。

仏教の復興よって彦琮は一千余人の同志とともに再出家を果たすことができた。再出家したということは、彦琮から再び道江に戻したのかということ、俗世の字の彦琮を名のり続けていたようである。それは以下のことから証明できる。

大業6（610）年7月24日、54歳で洛陽上林館翻經館において没した彦琮は、「俗縁哀悼し、葬を柏人に帰す」（T50.437c）とあるように、郷里にある小高い堯山（現在は邢台市隆堯県山口村）の山腹に葬られた。その石棺の入り口には右に「隋國翻經法師彦琮遺身石室」、左に「大業六年七月二十四日無常」と刻まれている⁶⁾。僧名の道江ではなく、字の彦琮として葬られているということは、復仏以後、終生道江を名のらなかつたということになる。

では、復仏後もなぜ俗世の字である彦琮のまま生涯を送つたのか。それを解く鍵は『通極論』に示される彦琮の仏教観にあると考えられる。

発心は即ち是れ出家なり。何ぞ落髮に関わらん。俗を棄て方に法に入ると称す。豈に簪を抜くを要せん。（T52.113b）

出家とは発心することであつて、必ずしも剃髮することを意味しないという。出世間的な価値観と生き方を実践することが重要であり、それが当時の「菩薩僧」の実態であつて、ここに彦琮が再出家しつつも僧名の道江に戻さなかつた理由があるのだろう。菩薩僧となつていた彦琮は、出家主義者ではないのである。

彦琮伝に、「素より虚冷を患い発痢するに時なし。因つて〔翻經〕館に卒す。春秋五十有四、即ち大業六年七月二十四日なり。俗縁哀悼し柏人に帰葬す」（T50.437c）とあるように、洛陽上林園翻經館において逝去したが、その遺体は郷里の柏人に埋葬されたという。その埋葬地は堯山である。堯山の東北数百メートルには、わずか12歳の彦琮が『法華経』を讀誦していた宣務山がある。文革によって周辺の仏教文化財はおおかた破壊され、さらに1978年以降の改革開放によって堯山の石灰岩は採掘されて当地の経済発展に寄与した⁷⁾。しかしそれと引き換えに彦琮墓

は破壊され、今はむきだしの石灰岩が無残にのこされている。

4. 著作とその散逸

彦琮が手がけた著作と翻訳（漢訳と梵訳）については、以下のような数量が記録にとどめられている。

『歴代三宝紀』巻12 (T49.106b) = 6部9巻 (597年, 彦琮41歳の時点)

『続高僧伝』巻2 彦琮伝 (T50.439bc) = 12部

『法苑珠林』巻100 (T53.1022c) = 10部22巻

達磨笈多伝四巻, 通極論一巻, 弁教論一巻, 弁正論一巻, 通学論一巻, 善財童子諸知識録, 新訳経序, 福田論一巻, 僧官論一巻, 西域玄志一巻

右此十部二十二巻 隋朝日嚴寺沙門積彦琮撰

以上を含め、さまざまな資料から検索してみると、現段階では単著25部、共編7部、梵語訳2部を確認することができた。また彦琮は『続高僧伝』の訳経篇に立伝されているように、数多くの仏典の漢訳にも従事している。道宣は彦琮の漢訳部巻数として「凡そ前後に訳経すること合して二十三部一百許巻」(T50.437c)と記している。筆者のこれまでの調査によって、彦琮は漢訳事業に参画しているが、その際に新訳の経典26部109巻分に序文を製していることが判明した。この数値と道宣が示している彦琮の漢訳仏典の数量(23部100許巻)はほぼ一致していることは看過できない。道宣は彦琮が漢訳事業に参画してそこで序文を撰した部数をもって、彦琮の漢訳部数と数えたものと想定できる。

【彦琮の著作】

単著

現存6部

『弁正論』『福田論』『通極論』『浄土詩』『釈法純叙賛』『合部金光明経序』

散逸19部

『弁聖論』『弁教論』『僧官論』『黙語論』『鬼神録』『慈悲論』『通学論』『沙門名義論別集』『那連提耶舍伝』『達磨笈多伝』『善財童子諸知識録』『唱導法』『新訳経序』『崇正論』『通徳論』『煬帝に呈示した文頌』『地獄に堕ちた夢の記』『林邑所得仏典の目録』『仏舎利の嘉瑞』(別記)

共編

現存3部

『衆経目録』7巻(法経録)『衆経目録』5巻(仁寿録)『無上秘要』100巻

(24)

釈彦琮の出自と著作 (齊 藤)

散逸 4 部

『西域志』 10 卷 (『大隋西国伝』) 『天竺記』 『衆経法式』 10 卷 『内典文会集』

梵訳**散逸 2 部**

『舍利瑞図経』 『国家祥瑞録』 (2 部合して 10 卷)

その生涯に上記 30 数部もの作品を著しながら、ほとんどが霧散してしまった。その理由は何か。岩井大慧 (1928) は、彦琮が没して 14 年後の武徳 7 (624) 年に、彦琮所住の長安日嚴寺が廢寺となったことをあげているが⁸⁾、それだけではないだろう。やはり隋唐で盛況する学派仏教や宗派仏教の系譜 (祖師) の中に彦琮の名が立てられなかったから、そしてそれ故にこそ体系的な思想継承とその伝承媒体となるはずの後継者が存在しなかったからに違いない。唯一の弟子が甥の行矩 (兄の子) であったが、彼にしても、彦琮伝の付伝 (T50.439c) によれば、

貞観の初め、奏勅にて追入せらる。既に京室に達し、将に翻伝に事せんとするに、遂に疾みて終り、開演を果たさず。郷族流働して柩を趙州に接す。

とあるように早逝している。また晩年の活動拠点であった洛陽上林園翻経院についても、没後わずか 4 年後の大業 10 (614) 年に当館を訪れた道宣が、「落漠風猷にして、綴旒なること誰か賞せん」としてその凋落したさまを報告している (『大唐内典録』 卷 5, T55.280a)。国営の翻経館における翻訳事業は隋の国力低下にともない資金繰りに苦しんでいたのである⁹⁾。このような事情からか、彦琮が撰した 30 数部もの著作は、その没後比較的早い段階で散逸してしまったのである。

おわりに

伝記によると、12 歳にして『無量寿経』の講義を契機として御史中丞の王劭との交流がはじまり、14 歳で敬長瑜、盧思道、元行恭、邢恕らに『大智度論』を講じ、また後主温公とその皇后と斛律氏、皇太后、朝臣らには『仁王経』を講じ、16 歳で一族の李翥 (李彦鴻) の計らいによって文林館の学士らと交流をもち、21 歳で通道観学士に抜擢され、隋になっても文帝、煬帝から信任を得て国家仏教の展開に尽力し、長安の大興善寺と日嚴寺や、洛陽の上林園翻経館に勅を奉じて入り、舍利遣使として二度も選任されたほどの活躍ぶりであった。こうした華々しい活動の背景には彦琮自身の才知と博識もあるだろうが、やはり趙郡李氏一族という名門の出自ということも、必ずや作用していたものと推察できるのである。

- 1) これまでに筆者は齊藤隆信（2012）、（2013）、（2014）を発表している。
- 2) 隆堯県には唐の初代皇帝李淵から四代遡る李熙と三代遡る李天賜の陵墓がある（建初陵と啓運陵）。唐室の李氏の祖籍については、これまで隴西李氏と趙郡李氏、北涼李氏などの説があったが、陳寅恪（1947）は、この二つの唐陵とそれを記録する『大唐帝陵光業寺大仏堂之碑』をとりあげ、趙郡の李氏こそを唐室の祖籍であると判断した。
- 3) 濱口重国（1966, p. 712）参照。
- 4) 李慎と李敦の兄弟がいつ柏仁に移住したのかは不明であるが、陳寅恪（1947）によると東晋の頃であろうと述べている。
- 5) 山崎宏（1981）参照。
- 6) 彦琮墓の規模については、破壊される前の記録と1980年代の写真が残されている。隆堯県地名弁公室編『隆堯県地名資料匯編』（内部発行、1983年）を参照。
- 7) 近年の報告として靳婷婷（2014）がある。また董樹仁『隆堯県志』（隆堯県地方志編纂委員会、三聯書店、1998年）も参照。
- 8) 岩井大慧（1928）参照。
- 9) 齊藤隆信（2014）参照。

〈参考文献〉

- 岩井大慧 1928「聖武天皇宸翰雜集に見えたる隋大業主浄土詩について」『東洋学報』17(2): 1-85.
- 陳寅恪 1947『唐代政治史述論稿』商務印書館。
- 濱口重国 1966『秦漢隋唐史の研究』下、東京大学出版会。
- 山崎宏 1981「北周の麟趾殿と北齊の文林館」『中国仏教・文化史の研究』法藏館、74-93.
- 齊藤隆信 2012「上林園翻經館沙門彦琮の漢訳論」『印度学仏教学研究』61(1): 30-36.
- 齊藤隆信 2013「彦琮撰『福田論』とその撰述意義」『印度学仏教学研究』62(1): 35-42.
- 齊藤隆信 2014「积彦琮と洛陽上林園翻經館」『印度学仏教学研究』63(1): 65-72.
- 靳婷婷 2014「保護文物古迹 発掘堯山文化——隆堯県堯山文物古迹現状調研報告——」『河北旅游職業学院学報』4期: 18-23.

（本稿は平成27年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「隋洛陽上林園翻經館沙門积彦琮の研究」（研究課題番号15K02048）による成果の一部である。）

〈キーワード〉 彦琮、趙郡李氏、行輩、堯山

（佛教大学教授、博士（文学））